

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 4 月 2 日現在

機関番号：12601
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：17K17464
研究課題名（和文）IPV被害妊婦の健全な育児とメンタルヘルス改善に向けたプログラム開発と効果の検証
研究課題名（英文）Development and effects of a program to improve parenting and mental health among abused pregnant women
研究代表者
キタ 幸子 (Kita, Sachiko)
東京大学・大学院医学系研究科（医学部）・助教
研究者番号：70757046
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではパートナーからの暴力（IPV）被害妊婦に向けた心理・育児支援に焦点を当てた効果的なケアプログラムを確立することを目標に、IPV被害女性の心身・社会的な回復を促すナラティブインタビューの効果、社会的困難妊婦へ支援外来の効果を検証した。結果、ナラティブインタビューは内的ステイグマ、首尾一貫性等の心理・社会的回復に一定の効果が認められ、支援外来は妊娠期から産後1か月、妊娠期から産後3か月の産後鬱症状の得点の変化量に有意に関連していた。更に、周産期医療者に向けたアクティブラーニング手法を用いた教育プログラムを開発、効果を検証した結果、IPV対応に関する知識と心理的バリアに効果が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではIPV被害女性の心理面、育児の改善に働きかけるナラティブインタビュー、周産期現場での支援外来の効果を検証した。その結果、両プログラム共に、IPV被害妊婦の心身・社会的な回復に効果的である可能性が示唆された。このことは、IPV被害妊婦への介入方法の確立と臨床導入の重要な一助となったと考える。更に、本研究では、周産期周産期医療者へのIPV対応に関する教育プログラムを開発し、その教育プログラムが及ぼす知識や心理的バリアへの効果を確認した。本知見は、周産期現場におけるIPV被害妊婦への適切な知識と支援の普及に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）： To suggest an effective care program focusing on psychological and parenting supports for abused pregnant women, this study tested the effectiveness of a narrative interview method promoting psycho-social recovery among abused women and a Psycho-social Support Clinic offered by Midwives and Social workers (PSSC-MS) for pregnant women with social difficulties. The results showed that the narrative interview was effective for psycho-social status among abused women, such as internal stigma and sense of coherence, and the PSSC-MS was significantly associated with the change in the scores of depressive symptom from pregnancy to one month postnatal and from pregnancy to three months postnatal. Moreover, this study developed an educational program using active learning methods and tested the effectiveness for perinatal health professionals. The results demonstrated that the educational program was effective for their knowledge and psychological barriers regarding interventions for IPV.

研究分野： パートナーからの暴力、トラウマケア、周産期メンタルヘルス

キーワード： パートナーからの暴力（IPV） メンタルヘルス 育児 ト라우マケア 妊娠期 教育プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

妊娠期のパートナーからの暴力 (Intimate partner violence: IPV) は、15.9-31.4%と頻度が高く (Kita ら, 2013; Kita ら, 2016; Inami ら, 2010) 深刻な周産期の健康問題である。妊娠期の IPV は、産後うつ、強い不安感、児への愛情の乏しさ・怒りや拒絶感、ネグレクト・身体的暴力といった産後の母親の育児行動・メンタルヘルスに多大な影響を与える (Chan ら, 2012; Kita ら, 2016)。また IPV 被害妊婦における産後メンタルヘルス・母子関係の悪化には、妊娠期のうつ症状や不安、ソーシャルサポート不足、睡眠障害、低い Quality of Life (QOL) 等の全般的な心理・社会・生活面の問題が影響を与えることが示唆されている (Kita ら, 2016)。このことから、周産期医療現場では、妊婦健診等の機会を通して、IPV 被害妊婦の早期発見と適切な対応が求められる。

従来、周産期医療現場における IPV 被害妊婦への支援として、IPV スクリーニング・IPV の知識・社会資源の提供といった暴力被害の状況把握と被害の軽減に焦点化した擁護的介入が推奨されてきた (Horiuchi ら, 2011)。しかしながら、近年発表された擁護的介入の効果に関するメタアナリシスでは、擁護的介入は 1~2 年後の暴力軽減に効果があるものの、被害女性のうつ症状・不安、外傷後ストレス症状 (PTSD) QOL 等の健康向上には寄与しないことが報告されている (Ramsey ら, 2015)。このことから、IPV 被害妊婦が抱える産後の育児上の問題やメンタルヘルス悪化を予防・改善するためには、従来の擁護的介入に加えた、更なる健康介入が必要であると考えられる。しかしながら、IPV 被害妊婦に対する周産期医療現場で行う産後の育児・メンタルヘルス改善を目指した周産期ケアプログラムは存在しなく、効果的な介入方法が確立されていない現状がある。

IPV 被害妊婦の産後の健全な育児確立・メンタルヘルスの改善に向けて、妊娠期から継続した IPV 被害妊婦のニーズに合った心理・育児支援が必要である。具体的には、従来の暴力の状況把握・被害の軽減を目指した擁護的介入に加えて、IPV 被害により生じた心理・生活・社会的な問題の把握とニーズに合った心理ケアや生活の助言などの、産後の育児やメンタルヘルスに直接働きかける周産期ケアプログラムが必要であると考えられる。本研究では、この IPV 被害妊婦に対する育児・心理支援に焦点を当てた周産期ケアプログラムを被害女性のニーズに合いかつ多忙な周産期医療現場に活用できる形に開発し、ケアプログラムの有効性の検証を行う。

また開発された周産期ケアプログラムの周産期医療現場における導入及び効果的な活用を目指し、周産期医療者に対する IPV に関する教育プログラムも開発する。先行研究では、医療者の IPV に関する正確な知識・認識の欠如、不適切な態度により、支援効果が十分に得られず、被害女性の 2 次被害 (第三者の無責任な言葉や態度により暴力被害者が更に傷つくこと) に繋がるということが報告されている (Ronnberg ら, 2000)。よって、本研究で開発した周産期ケアプログラムの適切で効果的な臨床応用に向けて、ケアの担い手である助産師・看護師・産科医師等の周産期医療者に対する学習効果が高い IPV 教育プログラム開発は必須であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、下記の 2 点を検証する。

- (1) IPV 被害妊婦の心理・育児支援に焦点を当てた周産期ケアプログラムを開発・効果を検証する【研究 1】。
- (2) 周産期医療者に対する IPV 教育プログラムを開発・効果を検証する【研究 2】。

3. 研究の方法

【研究 1】IPV 被害妊婦への周産期ケアプログラム開発と効果検証

(研究 1-1) IPV 被害女性の心身・社会的な回復を促すナラティブインタビューの効果検証

- (1) 目的：暴力を受けた後の回復や健康の促進を促すことを目的とした Clinical Ethnographic Narrative Interview (CENI) 法 (Denise, 2017) を用いたナラティブインタビューの短期的・長期的な効果を明らかにする。
- (2) デザイン：前後比較試験 (準介入研究) 介入前・介入 3 か月後、18 か月後
- (3) 調査期間：2017 年 11 月~2018 年 9 月、2019 年 6 月~2020 年 1 月
- (4) 研究対象者：過去に IPV 被害を受けた女性 23 名
- (5) 調査手順：
事前に CENI の開発者である Denise M. Saint Arnault 教授 (ミシガン大学 School of Nursing, Department of Health Behavior and Biological Sciences) から CENI を用いたインタビュー法に関する 30 時間のトレーニングを受けた。
2017 年 11 月~2018 年 9 月に、過去に IPV 被害を受けた女性 23 名を対象に、1 回の CENI を用いた個別インタビュー (約 1 時間半~2 時間) を実施した。また介入前・介入後 3 か月時点でウェブ調査システムを用いた自記式質問紙調査を実施した。
2019 年 6 月~2020 年 1 月に、同対象者に向けて、介入後 18 か月時点のウェブ調査システムを用いた自記式質問紙調査を実施した。
- (6) 調査項目：介入前・介入後 3 か月・18 か月時点で下記の項目を収集した。
属性：年齢、学歴、就労状況、家族構成等
不安と抑うつ：Patient Health Questionnaire (PHQ) (村松ら, 2009)
PTSD 症状：日本語版 PCL-5 (伊藤ら, 2015)

身体化症状：PHQ-15 Somatic Symptom Severity Questionnaire (PHQ-15) (Muramatsu ら, 2007)

内的スティグマ：Belief toward Mental Illness Scale (BMIS) (Hirai ら, 2000)

有意味感：日本語版 Sense of Coherence の下位尺度 (山崎ら, 2001)

ソーシャルサポート：Social Support Questionnaire for Transactions (SSQT)

(Suurmeijer ら, 1995)、Social Conflict Scale (SCS) (Pierce ら, 1991)

心的外傷後成長：日本語版外的成長後尺度 (PTGI) (Taku ら, 2007)

援助希求行動：Help Seeking Behavior Questionnaire (AHSQ) (Lin ら, 1986)

(7) 分析方法：

音声データは逐語録にまとめ、研究者による筆記データと対象者が記入したソーシャルネットワークマッピング・ライフライン・カードソート等のツールと併せて、質的記述的に分析した。

介入前、介入後 3 か月後・18 か月時点の心的外傷後成長、有意味感 (首尾一貫性)、身体化症状、不安・抑うつ、援助希求行動等の変数の割合・平均値 (n[%]、Mean[SD]) を Wilcoxon signed-rank 検定、Fisher の正確確率検定等を用いて前後比較した。

(8) 倫理的配慮：本研究は東京大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

(研究 1-2) 周産期医療現場における社会的困難妊婦への支援外来の効果検証

(1) 目的：周産期医療現場 (都内 A 施設) で実際に行っている社会的困難妊婦への支援外来の効果を検証する。

(2) 支援外来の内容：A 施設の参加外来では、妊娠初期に IPV、貧困、望まない妊娠などの社会的困難を有する妊婦をスクリーニングし、助産師 3 名とソーシャルワーカー 1 名が運営する支援外来に支援依頼をする。支援外来のスタッフは、妊娠中の面談 (約 3 回程度) と産後 1 か月の電話面談にて、継続的・丁寧な妊婦の問題とニーズをアセスメントし、地域の保健師、福祉専門家、司法関係者等の多職種と連携しながら、産後に安心した育児環境が整えられるように、支援を行う。

(3) デザイン：後方視的なカルテ調査 (追加調査)

(4) 調査期間：2018 年 5 月～2018 年 9 月

(5) 研究対象者：2016 年 6 月～2017 年 9 月に実施した妊娠後期から産後 3 か月の縦断観察研究に協力した母親 282 名

(6) 調査項目：

属性：年齢、婚姻状況、最終学歴、就労状況、世帯収入、初経産婦、既往歴、望まない妊娠の有無、精神疾患既往の有無等

妊娠中の IPV：Violence Against Women Screen (VAWS) (片岡, 2005)

幼少期の性的被害、幼少期の親からの暴力被害：オリジナル項目 4 項目

妊娠中～産後 3 か月の産後うつ症状：日本語版 Edinburgh Postpartum Depression Scale (EPDS) (岡野ら, 1996)

支援外来の受診の有無 支援内容・回数 (カルテ調査で収集)

(7) 分析方法：

傾向スコア解析を用いて、支援外来を受診した群、受診しなかった群の社会的状況のある程度、両群で揃えた。

次に両群で産後 1 か月・3 か月の産後うつ症状、ボンディング障害、虐待的育児行動の割合・平均値 (n[%]、Mean[SD]) を Welch t 検定、Fisher の正確確率検定等を用いて比較した。

(8) 倫理的配慮：本研究は東京大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【研究 2】周産期医療・保健関係者に対する IPV 教育プログラムを開発・効果検証

(1) 教育プログラムの開発：(研究 1-1)の質的データ、(研究 1-2)の支援外来の内容と、過去に研究者が実施した医療者への IPV 研修の経験及びその際の参加者の声を基に、当事者と医療者双方のニーズを分析し、周産期医療・保健関係者が明日から実行できるアクティブラーニング (実際のケースを想定したロールプレイとグループワーク等) を取り入れた教育プログラム (2 時間) を開発した。研修プログラムの内容は、周産期医療者 (助産師 3 名) にヒアリングを行い、実現可能性及び臨床応用性の確認を行った。

(2) デザイン：前後比較試験 (準介入研究) 介入前・介入直後

(3) 調査期間：2019 年 3 月

(4) 研究対象者：都内 A 施設で開催された周産期医療・保健医療関係者向けの IPV 研修に参加した者 82 名

(5) 調査手順：研究者が実施するアクティブラーニングを取り入れた教育プログラム (2 時間) の前後で、自記式質問紙を配布、回答を依頼した。

(6) 調査項目：介入前・介入後で下記の項目を収集した。

属性：年齢・性別・職種・臨床経験・現在の所属等

IPV とその対応の知識：オリジナル項目 11 項目

IPV とその対応の認識：オリジナル項目 8 項目

IPV 対応の実践：過去 2 か月における「DV スクリーニング」「DV 被害者への面談」「DV

や相談窓口に関する情報提供」「セーフティプランの作成」「チーム内での DV ケースの共有」等の実践の有無・件数等

- (7) 分析方法：介入前、介入後の IPV とその対応の知識・認識の平均値 (n[%]、Mean[SD]) を Welch t 検定を用いて前後比較した。
- (8) 倫理的配慮：本研究は東京大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

【研究 1】IPV 被害妊婦への周産期ケアプログラム開発と効果検証

(研究 1-1) IPV 被害女性の心身・社会的な回復を促すナラティブインタビューの効果検証

(1) 対象者の流れ

過去に IPV 被害を受けた女性 28 名にリクルートを行い、その内、23 名が介入前の自記式質問紙調査、個別インタビューにご協力いただいた。介入後 3 か月時点、18 か月時点での自記式質問紙調査にご協力いただいたのは、19 名、9 名であった。

(2) 属性

対象者の年齢は平均 46 歳であった。約半数 (48%) が中等度～重度のうつ症状、約 7 割 (68%) が中等度～重度の身体化症状、約 3 割 (32%) が中等度～重度の不安症状、約半数 (44%) が PTSD 症状である侵入症状、認知と気分の陰性の変化、覚醒度と反応性の著しい変化があると判断された。更に、約 7 割 (68%) が専門家に診てもらわなければならないと感じたが相談しなかったと回答した。

(3) 前後比較

介入前に比べて、介入後 3 か月時点で有意に低下 ($p < .05$) したのは、内的スティグマの【低い対人・社会能力】【危険性】、ヘルプシーキングバリアの【フリーズ】【恥】【情動的バリア】【恐怖の結果】、首尾一貫性の【把握可能感】【有意味感】、心的外傷後成長の【新たな可能性】、PTSD 症状の【回避症状】であった。また介入前に比べて、介入後 3 か月時点で有意に上昇 ($p < .05$) したのは、ヘルプシーキングバリアの【社会的バリア】【外的バリア】【不便さ】、PTSD 症状の【侵入症状】であった。

更に、介入前に比べて、介入後 18 か月時点で有意に低下 ($p < .05$) したのは、内的スティグマの合計得点と【低い対人・社会能力】であり、有意に上昇 ($p < .05$) したのは、【誰かの助けの必要性】【精神的ケアの必要性】、PTSD 症状の【覚醒度と反応性の著しい変化】だった。また介入後 3 か月時点に比べて、介入後 18 か月時点で有意に低下 ($p < .05$) したのは、【誰かの助けの必要性】【精神的ケアの必要性】であり、有意に上昇 ($p < .05$) したのは、ヘルプシーキングバリアの【希望のなさ】【不満足さ】、PTSD の合計得点と【侵入症状】であった。

(研究 1-2) 周産期医療現場における社会的困難妊婦への支援外来の効果検証

(1) 属性

対象者 (282 名) の年齢は平均 31 歳で、約半数 (55%) が初産婦であった。妊娠中に IPV 陽性と判断された者は 13.5%、幼少期に被虐待経験 (身体的・精神的・性的虐待) を有する者は 21.3%、精神疾患の既往歴を有する者は 5.3% であった。妊娠中～産後 1 か月で支援外来を受診した対象者は 37 名 (13%) であった。

2) 群間比較

傾向スコア解析を用いたマッチング前では、支援外来の受診あり群 (37 名) は受診なし群 (245 名) に比べて、年齢、初産婦・就労・精神疾患既往・IPV 被害・望まない妊娠・幼少期の被虐待体験の割合、妊娠後期と産後 3 か月の EPDS 得点、妊娠後期から産後 1 か月の EPDS 得点の変化量、妊娠後期から産後 3 か月の EPDS 得点の変化量が有意に高かった ($p < .05$)。

傾向スコア解析を用いたマッチング後では、支援外来の受診あり群は受診なし群に比べて、精神疾患既往歴と IPV 被害の割合、妊娠後期の産後うつ症状の得点が有意に高かった。マッチング後も各群の属性に差が見られたため、Doubly Robust 推定量を用いた結果、支援外来の受診は、妊娠後期から産後 1 か月の産後うつ症状得点の変化量 ($\beta = .33$)、妊娠後期から産後 3 か月の産後うつ症状得点の変化量 ($\beta = .33$) に有意に関連していた ($p < .05$)。

【研究 2】周産期医療者に対する IPV 教育プログラムを開発・効果検証

(1) 対象者の流れ

都内 A 施設で開催された周産期医療・保健医療関係者向けの IPV 研修に参加した者 99 名の内、82 名が研究同意、教育プログラム介入前の自記式質問紙に回答し、79 名が介入後の自記式質問紙に回答した。

(2) 属性

対象者の年齢で最も多かったのは 40～49 歳 (37%)、職種はソーシャルワーカー (44%)、次いで看護師 (18%)、保健師 (15%)、助産師 (12%) であった。所属は医療機関が 66% と最も多く、次いで保健センター (19%) だった。過去に IPV ケースに対応した経験があると回答した者は 67% だった。

(3) 前後比較

介入前に比べて、介入後は IPV の対応に関する知識の正答数が有意に上がり ($p < .05$)、IPV の対応に関する認識 (心理的バリア) は有意に下がっていた ($p < .05$)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 キタ幸子	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 家族内の暴力の多重性・連鎖性を研究する～1人の家族員から2つの事象を評価する～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族看護学研究	6. 最初と最後の頁 224-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 キタ幸子, Edward Chan Ko Ling, 白川美也子, 岸恵美子, 上別府圭子	4. 巻 37(2)
2. 論文標題 大会企画シンポジウム4 複数の暴力が起きている家族の理解と支援 - IPV、児童虐待、高齢者虐待のつながり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族療法研究	6. 最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 キタ幸子	4. 巻 62(8)
2. 論文標題 当事者団体との関係性を育むーIPV被害者の声を聞くー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保健の科学	6. 最初と最後の頁 508-512
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Tobe Hiromi, Kita Sachiko, Hayashi Mayu, Umeshita Kaori, Kamibeppu Kiyoko	4. 巻 102
2. 論文標題 Mediating effect of resilience during pregnancy on the association between maternal trait anger and postnatal depression	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Comprehensive Psychiatry	6. 最初と最後の頁 152190～152190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.comppsy.2020.152190	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kita Sachiko, Tobe Hiromi, Umeshita Kaori, Hayashi Mayu, Kamibeppu Kiyoko	4. 巻 18
2. 論文標題 Impact of intimate partner violence and childhood maltreatment on maternal?infant maltreatment: A longitudinal study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jjns.12373	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kita Sachiko, Hayashi Mayu, Umeshita Kaori, Tobe Hiromi, Uehara Nana, Matsunaga Momoe, Kamibeppu Kiyoko	4. 巻 -
2. 論文標題 Intimate partner violence and maternal child abuse: The mediating effects of mothers' postnatal depression, mother-to-infant bonding failure, and hostile attributions to children's behaviors.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychology of Violence	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/vio0000245	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kita Sachiko, Chan Ko Ling, Tobe Hiromi, Hayashi Mayu, Umeshita Kaori, Matsunaga Momoe, Uehara Nana, Kamibeppu Kiyoko	4. 巻 -
2. 論文標題 A Follow-Up Study on the Continuity and Spillover Effects of Intimate Partner Violence During Pregnancy on Postnatal Child Abuse	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Interpersonal Violence	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0886260518821460	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kita S, Umeshita K, Tobe H, Hayashi M, Kamibeppu K	4. 巻 -
2. 論文標題 Intimate Partner Violence, Negative Attitudes Towards Pregnancy, and Mother-to-Fetus Bonding Failure among Japanese Pregnant Woman	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Violence and Victims	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 キタ幸子	4. 巻 72(5)
2. 論文標題 暴力被害を受けた妊婦と子どもを守る-助産師は今、何が出来るか-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 助産雑誌	6. 最初と最後の頁 324-330
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kita S, Haruna M, Matsuzaki M, Kamibeppu K	4. 巻 -
2. 論文標題 Does Antenatal Social Support Affect the Relationships Between Intimate Partner Violence During Pregnancy and Perinatal Mental Health?	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Violence Against Women	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 キタ幸子	4. 巻 59
2. 論文標題 ドメスティック・バイオレンス (DV) のない社会をめざして - 在日外国人女性におけるパートナーからの暴力 (IPV) 被害の理解と支援	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 保健の科学	6. 最初と最後の頁 697-703
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 キタ幸子, Saint Arnault DM, 上別府圭子
2. 発表標題 Clinical Ethnographic Narrative Interview (CENI) が及ぼすDV被害女性への効果 ~ 日本でのアンケート調査から ~
3. 学会等名 2019年度トラウマケア公開講座 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 キタ幸子, 戸部浩美, 上別府圭子
2. 発表標題 妊娠中のパートナーからの暴力（IPV）と産後の児童虐待との関連に影響を与える心理的要因の検証
3. 学会等名 第33回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiromi Tobe, Sachiko Kita, Kiyoko Kamibeppu
2. 発表標題 Anger and Depression in the Perinatal Period in Japan: Longitudinal Study
3. 学会等名 第33回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 キタ幸子
2. 発表標題 妊娠中の母子へのDV-発見と対応の基礎知識
3. 学会等名 東京ウィメンズプラザ（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 キタ幸子
2. 発表標題 家族内の暴力の多重性・連鎖性を研究する～1人の家族員から2つの事象を評価する～
3. 学会等名 第3回家族看護学研究セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kita S, Umeshita U, Tobe H, Hayashi M, Sato I, Soejima T, Sakka M, Kamibeppu K
2. 発表標題 Associations between intimate partner violence before and during pregnancy, negative attitudes towards pregnancy and mother-to-fetus bonding failure
3. 学会等名 21st East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) & 11th International Nursing Conferences (INC) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kita S
2. 発表標題 Japanese strategies to prevent violence against women- focusing on Intimate Partner Violence -
3. 学会等名 Academy on Violence and Abuse 2017 Global Health Summit (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 キタ幸子
2. 発表標題 暴力被害を受けた女性と子どもの理解と支援
3. 学会等名 日本赤十字九州国際看護大学主催国際フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 キタ幸子
2. 発表標題 ドメスティック・バイオレンス (DV) 家庭にいた子どもの情緒・行動的発達とDV加害者である父親との面会が及ぼす影響
3. 学会等名 第20回シェルターシンポジウム2017 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 キタ幸子
2. 発表標題 ドメスティック・バイオレンス(DV)家庭にいた子どもの情緒・行動的発達とDV加害者である父親との面会が及ぼす影響
3. 学会等名 東京都弁護士会第10回後期弁護士会研修講座(招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 キタ幸子, 戸部浩美, 梅下かおり, 今井紗緒, 上別府圭子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩崎学術出版社	5. 総ページ数 10
3. 書名 乳幼児精神保健の基礎と実践. アセスメントと支援のためのガイドブック	

1. 著者名 キタ幸子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 4
3. 書名 系統看護学講座 別巻 家族看護学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	上別府 圭子 (Kamibeppu Kiyoko) (70337856)	東京大学 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	戸部 浩美 (Tobe Hiromi) (60823143)	東京大学 (12601)	
研究協力者	村本 美由紀 (Muramoto Miyuki)	東京大学 (12601)	
研究協力者	セイントアーナルト デニース (Saint Arnault Denise)	ミシガン大学	
研究協力者	チャン コ リング (Chan Ko Ling)	香港理工大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	University of Michigan			
中国	香港理工大学			